

# 全柔連各部 委員長に聞く

○その5

## 高橋邦郎 医学委員長



全柔連の医学委員会は最近「背負い投げロボット」や「打ち込みマシン」の開発で話題を呼んだ。また1995年柔道開催の世界選手権に向けてはドーピング対策が新たな仕事になってくる。その采配の任を預るのは医学博士・高橋邦郎委員長(63歳)である。私たちの仕事もだんだん理解されてきた」と語るが、あらためて、どんな取り組みをしているのか概観をたずねてみた。

(インタビュー/田中館哲彦)

### 各種の問題と取り組む 金メダルを陰で支える

#### ヨーロッパへの対抗と 体力チェック

——1980年代の初期、初代委員長になった関口先生(故人)や高橋先生が中心になって作られたんですね。

高橋 だけど学生柔道に端を発したいわゆる内紛で、長い間“開店休業”の状態だったんですよ。私で3代目です。

——医学委員会設立の前、76年、全柔連に科学研究部ができた時も高橋先生は参画されてたんですね。

高橋 ええ。あれは名古屋に五輪を誘致しようという時期で、西ドイツ型の組織充実を図ろうとしていた頃でした。外部のドクターに委託して強化委員会の中に作ったんです。

——現場で受け入れる、生かされるという認識はまだあまりなかったんじゃないですか。

高橋 体育科学をやる人たちが即効性を意図したんです。ところが、対世界で日本は今よりだいぶ強くて、そんなことをやるんなら練習をもっとやれてことでね。日本は技術柔道。ヨーロッパは体力柔道。技術柔道というのは時間がかかる。だから外国勢は技術じゃすくに追いつかないからと、体力柔道でどんどんきたわけですね。日本は当時、大会のいろんな記録も十分に整っていませんでした。

——影響力が出はじめたのはいつ頃ですか。

高橋 おそらくそれが初めてだったと思うんですが、“三羽烏”(山下泰裕、松井勲、吉岡剛)が強化選手になった頃(70年代半ば)ですね。吉岡が東京大の分院でメディカルチェックをしたんです。

——といいますと。

高橋 その少し前に警視庁の選手が試合してて亡くなられたのがきっかけでしたね。その激しい強化に耐えられるかと、指導者が彼の心肺機能のほうを心配したんですね。

——吉岡選手は巨漢でしたね。

高橋 ええ、大きな体してましたからね。彼は1500メートルを完走することはなかったように思います。ヨーロッパでは動けない選手はすぐ警告される。5分間、どんどん技を掛けられないと駄目ですから。

——つまり、外国選手に対抗するためにも体力チェックが必要だということですね。

高橋 はい。だから肥満型が少なくなってきたですね。

——1500メートル、余談になりますが、山下、松井剛選手はどうでしたか。

高橋 走ってました。少し後になると正木(嘉美)、斎藤(仁)も走りましたからね。斎藤は山下に追いつき追い越さないとってことで、かなり努

力しましたね。

——日本代表がチームとしてメディカルチェックをやりだしたのは。

高橋 ロス五輪(84年)の前にチームを引き連れてやりました。

——一番注視する点は。

高橋 怖いのはやはりケガなんですね。柔道の特性からケガは避けて通れない。そして一度ケガすると大会も多くなってるので、なかなか治しにくいですからね。

——ケガなんてどこにもないという選手を見つけるのは難しいですね。

高橋 一方、日本の柔道はどうだったか。世界のレベルアップもあるけど、層が薄くなってきた。昔は1階級3、4人のうち誰を出しても優勝

できるような布陣でした。ところが今は一人かせいぜい二人。その選手がケガをすると本命がいなくなってしまうという状況です。ですからケガの予防が第一。ケガをしたらできるだけ早い回復をはかることが、いっそう重要になってきていると思います。

#### 科学研究部とは 協力しあって推進

——科学研究部との役割分担はどうなるのでしょうか。

高橋 科学研究部は運動の処方箋とか情報収集とかによる短期的な強化

ですね。医科学のほうは中・長期的対策になりますね。しかし、競技力向上という一点で協力しあう『車の両輪』の関係です。メンバーの交流もありますし。

——医科学のメンバー構成は。

高橋 今、17人です。体育科学、バイオメカニクス、心理学、栄養学、衛生学、歯科学、物理学等々およそ10部門くらいにわたってます。もう経験主義だけでは成果をあげにくくなってきていますからね。

——歯科といいますと？

高橋 去年からその分野のドクターに入ってもらったんです。というのは男子に虫歯が多いんです。これはいけない。力を入れる時、ぐっとかみしめますからね。それが悪いと奥歯にきますから。それに虫歯になること自体健康管理が悪いことの証ですから。一見こんなことが、と思うようなことが支障になり、競った時に負けてしまうことにもなるんです。だから今年の暮れの女子合宿でも少しお金をかけてやります。

——減量も難しい問題でしょうね。

高橋 やはり太ったりやせたりを繰り返すのは体に良くないですからね。体の動きが悪くなってケガを招きやすい状態もつくりかねない。その点、ヨーロッパの選手は体重変動はそんなに激しくないんですよ。

——どうしてでしょう。

高橋 オープンの試合がないからだと思います。日本は学生の大会となる団体戦目指して太りますから。それとお酒を飲む選手が多いですね。1回で4000~5000カロリーになるんじゃないでしょうか。ですから祝勝会が終わると3~4kg太る選手もいますよ。

——最近、超音波法による体組成、つまり筋肉量と脂肪関係の調査などにも着手されてるようですが。

高橋 同じ体型、体重であってもその中身はどうか、ということですね。それでまだ落とせるとか、もっと増やしてもいいとかいうことがわかってくる。つまり適性の階級が決まってくるわけです。たとえば昨年のバルセロナ五輪優勝者の吉田(秀彦)君ですね。「78kg級はもう限界だ」と言ってきた。それで調べて86kgで行くことにしたんです。

——先頃話題になったロボットについてはどうなっていますか。

高橋 今、改良に取り組んでいます。先般は71kg級の吉鷹(幸春)君をモデ

ルに造った。ところが80kgぐらいの選手にやらせたら機械が壊れてしまったんです。実際の動きってのはすごい力を発揮するんですね。

——機械と生きた人間の違いでしょうか。

高橋 人間の出す力を測定するのが一番苦労します。火事場のバカ力、というのがありますが、生理的・心理的限界をどう把握できるのか……。大相撲でよく何かひとつの型をつくれと言いますね。その型にはまった時は、小さくて力がないと思われている力士でも上の力士を負かす。

——そこが面白いところですね。

高橋 だから、古賀(稔彦)君や小川(直也)君もツボにはまれば道衣を着せたら唾を投げるができると思いますよ。道衣のたわみに柔道ゆえの競技性がありますから。

——興味の尽きない研究開発になりそうですね。

高橋 打ち込みマシンも、捻りのトレーニングができるように改造しているところなんです。

——話は戻りますが、技術柔道できた日本、体力的強化比重はどうでしょう。

高橋 試合時間が短くなってきて、国際ルールも急テンポで改正されてます。ある意味では技術を出す間もなく、100メートル・ダッシュのような体力勝負になってきている面もある。ですから重要になってきてますね。

世界で柔道が発展し、日本が金メダルを取る道は難しくなってます。これは当然といえるんですが、やはりそれでも金メダルを多く取ってほしい。そのために陰で支えていたら、と思っています。柔道をたしなんだ学者の方も少なくない。関心を持たれている方も多い。その方たちの協力を仰ぎながら総体的な取り組みを充実させていきたいと思っています。

☆ ☆ ☆

高橋委員長は1939年11月3日生まれ。東京出身。7段。現役時代、173cmの86kg。宮城・薬館高校で柔道を始める。東京教育大に進み、全日本学生や団体などに出場。同年代に古賀武(日大)、田中章雄(明治大)らの猛者がいた。卒業後、岐阜大、名古屋大等を経て85年、井之頭学園に着任。現在、同学園理事長、藤村女子中・高校校長。全柔連理事。衛生学で学位取得。